

📷 ふれあいトークin平地区



📍 FARO iwaki

📅 7/31(木)



「市長と地域ふれあいトーク」を平地区で開催しました。「たいらまちづくり株式会社」「NPO法人タイラボ」「平地区地域おこし協力隊」の皆さんと懇談し、県内で初めて「ほこみち」に指定されたいわき駅前大通りについて、現在の利用状況や実施予定の事業紹介、これからのまちづくりの展望などについて意見交換しました。

📷 第13回フラガールズ甲子園



📍 いわき芸術文化交流館

📅 8/17(日)



高校生がフラダンス日本一を競う文部科学大臣杯全国高校フラ競技大会「第13回フラガールズ甲子園」が、アリオスで開催。全国から20校（本市からは5校）、167人がエントリーし、最優秀賞には、あさか開成（郡山市）が選ばれました。

いわき勢では優秀賞（総合第2位・初代フラガール賞）にいわき湯本高校、特別賞（ロートは、ハートだ。賞）にいわき総合高校が輝きました。

写真が語る「いわき」の歴史

サンマの時代

いわき地域学会 小宅幸一

回遊魚であるサンマは成長して夏から秋にかけ南下します。常磐沖には10月～12月に移動し主漁期となります。まさに“潮目の海”の一つがいわき沖でした。

昭和21（1946）年に千葉県で敷網の電気棒受網漁が^{しきあみ}開発されて、サンマの漁獲量が急増し、いわき漁業の主役の一つとなりました。

昭和27（1952）年の記録によると、いわき地方から出漁したのは266隻で、江名港99隻、中之作港67隻、小名浜港60隻、以下四倉、久之浜、豊間の各港でした。

新聞には「^{ふなあし}いわきの各港には船倉を満杯にしたサンマ船が船足重く接岸する。サイレンが市場にひびき渡り、待ち構えていた人達がサット船に寄る。まもなく入札が始まる。相場が決まると同時に各船では、大きな「タモ網」で4、5人の漁師がサンマをすくい上げる」と港の熱気を報じていました。

子どもたちは市場周辺で、雑踏に紛れてトラックや万漁籠から落ちこぼれたサンマを拾い集めていました。

サケ・マス漁の盛んだったこの時期、水揚げ高をみると、北洋サケ・マス漁業が“表作”であって、サンマ漁業はいわば“裏作”的な存在でしたが、昭和50年代に北洋サケ・マス漁が撤退するとサンマ漁が中心と

なり、いわきの港には3～4万トが水揚げされました。

しかし、海流の変化や他国との競争、漁業従事者の減などで、日本全体のサンマ漁獲量は減少していきます。いわき市はこれに原発事故の風評も加わって苦境が続きます。

回復への道のりは平坦ではありませんが、一日も早く復活してもらいたいと思います。



■写真 港が活況を帯びるなか、トラックに満載されたサンマ
[昭和40（1965）年12月 渡辺聖一氏提供]